Japanese Association for Religious Studies

はない。宗教間対話の比喩は一層混乱を引き起こす。言い回しの修正（たとえば勝利主義史観的表現の削除）だけでは根本的な解決にはならない。

一つ確かなこととして言えるのは、困難は単に記述や事実認識をめぐるものではなく、これまでの宗教の分類方法に根があるということである。中でも世界宗教・民族宗教の分類は、宗教史の記述、特にユダヤ教―キリスト教関係史、部族宗教―イスラム関係史、ヒンドゥー教―仏教関係史の記述を大きく規定してきた。しかもそこには、日本特有の問題もある。近年の「世界宗教」の概念に対する歴史的な批判研究としては、増澤知子やジョナサン・スミスによるものが知られている。それらの研究からわかることの一つに、欧米では、かつては世界宗教をキリスト教、イスラム、仏教に限定していたが、後の研究者たちは「多元主義的エチケット」のために七に増やし、現在は「世界の諸宗教」という意味に変容したということである。これに対して、日本では世界宗教のカテゴリーは、現在も三宗教に限定して使われることが多く、その理由は『宗教学辞典』（小口・堀監修）の鈴木範久による説明から変わっていない。すなわち、M・ウェーバー以来の現世拒否的救済観の有無である。その原因として考えられるのは、一つには、「多元主義的エチケット」を求められるような日常的状況がないこと、もう一つは、西洋近代合理主義の特殊な発展（そしてそれと対をなす東洋の特殊性）を宗教文化という点から説明することへの需要が高いこと（そこに世俗的観点から宗教史を学ぶ意義を帰してきたこと）である。特に後者の関心の下では、（ウェーバー・テーゼに則り）カルヴィニズムに収斂していくようにユダヤ―キリスト教史を構成することになるため、否応なくプロテスタント中心的なキリスト教観になる。つまり、日本では、近代化論的関心が無自覚のうちにプロテスタント護教論、文化特殊性論を容認してきたという問題がある。特定の理論的観点からの構築物であったはずの類型が、各宗教に内在する本質であるかのように捉えられてきたのである。

それではこの問題について、宗教の基礎コースを教えなくてはならない者はどうすればよいだろうか。各宗教史の専門家が問題に取り組み、記述を修正するのを待つしかないのか。ここで提唱したいのは、逆に教育の場を積極的に活用することである。従来の学問論（科学論）では、研究者と研究対象の間の相互作用はよく議論されてきたが、多くの研究者はまた教室においても他者との相互作用を経験する。解釈学的循環はそこにも発生していることを意識的に研究に取り込むことについて、一つのテストケースを示す。

宗教教育の二方向
――水平的多元主義と垂直的多元主義のあいだ――

津城寛文

現代日本の宗教教育論は、何を目的とするかによって、大まかに四つに分けられる。政官主導の「道徳心」「公共心」の涵養を主張するもの、既成教団や法曹界主導の「オカルト」的な

NII-Electronic Library Service

Japanese Association for Religious Studies

「カルト」対策の役割を強調するもの、教育界主導の「生命への畏敬」を重視する意見、宗教学の一角から異文化教育の側面を持った「宗教文化」理解の必要性の提案である。

「公共心」「オカルト」に注目して、宗教の二つのタイプを戯画的に描けば、一方に社会的な公共宗教、他方には他界的なオカルト宗教がある。「生命」は、社会的な意味でも他界的な意味でも考えられている。「文化」教育では、他界的な話題はやや周辺的である。ここでは「宗教多元主義」という耳慣れたキーワードを、諸宗教の諸要素は多様であることを配慮する、というほどのゆるやかな意味で用い、それを水平方向、垂直方向で考える。

宗教的多元主義は、諸宗教が歴史地理的に多様であるという「水平」的な分布が見えやすい。チャーチ／セクト論などは、社会内における宗教組織の構造機能のモデル化である。他方、私秘的で求心的な神秘主義と言われるタイプは、しだいに世俗（社会）との関係が薄れ、極点では世俗外へと消滅する。瞑想、恩寵などの宗教体験の分類の試みは「垂直」的な多元主義といえる。水平／垂直の対比は、日本の宗教教育の議論では、まだ明確な主題として定着していないが、随所で不可避的に言及される。この両次元を繰り返し主題化している典型は、宗教（霊性）に「水平的または変換的」なものと「垂直的あるいは変容的」なものを区別するウィルバーと、その支持者たちである。

水平的な宗教多元主義の教育では、普遍主義（理想化された包括主義）と棲み分け主義（洗練された排他主義）とのあいだの、最後の落とし所の対立が問題となる。垂直的な宗教多元主義の教育では、内面的な次元の重層的な見取り図が考えられる。ヒックは宗教多元主義の中で、他界のさまざまなビジョンを比較検討し、「世界の多元性、あるいは空間系の多元性」と表現している。これは「未来の生命」（死後生）が発達してゆく「空間」が多元的・多層的であるという意味で、「垂直的」な多元主義の話題である。グロフは、「霊的発達とは、あらゆる人間が生まれながらにして持っている進化の能力」と宣言し、そのプロセスで遭遇する危険な段階を、「魂の危機」と呼び、また「支援的な環境のもとで適切な理解が得られれば、こうした困難な精神状態はきわめて有効」という意味で、霊的「危機」は霊的「出現・発現」でもあると表現した。

ただし、垂直次元の宗教知識が学習されさえすれば、「若者の探究心」が「カルトのようなものに惹きつけられる」といった戯画的な（結果的には凄惨な）ことは起こらなくなるだろう、とは言い切れない。むしろ、垂直次元に関心を集中すると、軽視した次元に死角ができ、水平的な諸問題に無防備になる（逆も然り）。垂直的な「本格性」をめざす宗教・世界観は、水平的な「合法性」を持つ宗教・世界観にとって、原理的に危険を孕む。

授業を受ける側に視点を当てると、一方には、宗教の社会的機能に関する問題意識があり、他方には、他界的な関心がある。それぞれの関心は正当な理由を持っており、いずれに対しても、教える側は適切に対応することが望まれる。

NII-Electronic Library Service